

佐藤琢磨選手インディ500で快挙 世界に通用する日本人づくりを

ジャーナリスト

三木寛郎

新型コロナウイルス感染症で
無観客開催となったインディ500

例年なら5月の最終月曜日・メモリアルデーの前日の日曜日に開催されるはずのインディアナポリス500マイルレース（以下インディ500）は、新型コロナウイルス感染症の影響で開催が延期され、現地



写真提供：本田技研工業株式会社

時間2020年8月23日に米国インディアナ州インディアナポリスにあるインディアナポリス・モーター・スピードウェイで、無観客で開催された。

日本から唯一、このレースに参加している佐藤琢磨選手（43）は2017年に日本人（アジア人）ドライバーとして初の優勝を飾っているが、この無観客のレースで2勝目の優勝という快挙を成し遂げた。

インディ500は「ル・マン24時間レース」、「モナコグランプリ」と並んで世界3大レースの1つとされ、また米国では野球の「ワールドシリーズ」、フットボールの「スーパーボール」、ゴルフの「全米オープン」と並んで4大スポーツイベントに数えられている。

今回は無観客での開催となったが、例年決勝レースには40万人もの観客がインディアナポリス・モーター・スピードウェイとその周辺に集まり、スタート時の観衆の歓声はスピードウェイ全体から湧き上がり、33台のレーシングカーの爆音がかき消すほどである。

最初にインディ500が開催されたのは1911年（明治44年）のこと。当時インディアナポリスは黎明期にあった米国の自動車産業界の中心都市であり、そのためのテストコースも必要であった。そこで現在の場所に1周2.5マイルのオーバル・コースが作られたのだ。当初は砂利をタールで固めた原始的な舗装だったが後にレンガ敷になり、ブリックヤードという愛称が生まれることになる。もちろん今は舗装路である。そこを200周して争われるのがインディ500なのだ。今までに戦争による中断はあったが、現存する自動車競技用の専用コースで行われるレースとしては最も歴史の長

いものの1つで、佐藤琢磨選手が2勝目を上げた2020年のレースで104回目の開催となった。

最初のレースの優勝者であるレイ・ハルーンの平均速度は74.602マイル（約時速119.36km）、今回の佐藤琢磨選手の平均速度は157.824マイル（約時速252.52km）であり、このデータはまさに自動車の進化を物語っている。ちなみに過去最速は2013年の優勝者トニー・カナンで平均時速187.433マイル（時速301.644km）であった。

優勝者の速度はあくまでも500マイル走行しての平均であり、ピットストップや事故等による低速走行も含まれている。実際のレースでは時速370kmを超えることも少なくない。

これまでに複数優勝を成し遂げているのは今回の佐藤琢磨選手を含め

て20人で、4回優勝者が3人、3回優勝者が7人、そして2回優勝者が佐藤琢磨選手を含め10人となっている。119年・104回の歴史で、複数回の優勝を経験したドライバーが20人しかいないということは、いかにこのレースに勝つことが難しいかを物語っている。

佐藤琢磨選手の2回目の勝利は、世界的にも偉大なことであり、まさに歴史的快挙なのだ。

速ければ良いわけではない。 ドライバーの質も大切。

いっぞや、日本人ドライバーを海外で取材をしたことがあったが、優勝した日本人ドライバーにレースの感想を尋ねたら

「バリバリっす」

と返され、メディア一同が嘩然となったことがあった。日本代表として海外に送り出す以上、最低限の英会話とマナー、そして知性と教養を身につけさせることは当然だと考えるし、インディ500のみならず世界のレースを取材すると、ドライバーのインタビューに対する受け

答えや立ち居振る舞いなどが、実にしっかりしていることに感心させられる。確かに一部のドライバーやライダールーたちの「ヤンチャ」な振る舞いはあるが、おしなべて及第点をとっていると感じるのだ。

ところが日本の場合、全員とは言わないが多くのドライバーやライダールーたちが態度が不遜であったり、無礼であったり、礼節を欠いた野卑な言動や振る舞いをするのが少なくないのだ。残念ながら、彼らの指導者たる自動車メーカーやレーシングチームのスタッフたちも同様である例は少なくない。

今回の偉業を成し遂げた佐藤琢磨選手はといえば、英会話は達者であるし、周囲の人間への心遣いは出来るし、何よりも会話自体が英語であつても日本語であつても、とても理路整然としている。確かに若い頃からイギリスでレースに参加し、最終的にF1に参加するところまで行った経験があり、そこから米国に渡り2010年からインディーカー・シリーズに参戦するようになった経緯があり、そうした経験から彼は海外におけるレーシング・ドライバー

の身の処し方や立ち居振る舞いを身につけていったのだと考えられる。

世界に通用する「人間づくり」こそ求められる。

佐藤琢磨選手に限らず、アマチュアスポーツやテニス、ゴルフ、バスケットボールなど様々なスポーツの分野で海外に進出する日本人が増えてきている。だからこそ、いま海外に通用する日本人を形成するための教育が必要になってきており、また日本の教育そのものが問われているのではないだろうか。不思議に、日本で中等教育や高等教育を受けた人たちよりも、若くして海外に飛び出した人の方が、「慣れ」や語学力を差し引いたとしても、きちんとした立ち居振る舞いや対応が出来ているように感じるのは筆者だけではない。まい。

今回の新型コロナウイルス感染症においても、世界規模での対応が求められる。日本のみならず世界の先進諸国が丸となってその対応を迫られている面は否めない。様々な側面はあるだろうが、地球は小さくなり



写真提供：本田技研工業株式会社

つつあり、世界の国々は近づいてきているのである。

新たな政権が発足する日本においても、世界がその行方を見守ったように、こうした世界の潮流をしっかりと見据え、新しい世界観に基づいた「人間づくり」を推進していかなくてはならないはずである。自動車レースに限らず、これからも多くの日本のアスリートたち、さらには様々な分野の若者たちが海外に進出していくはずである。

国家だけでなく、様々な分野における指導者たちに、世界に通用する「人間づくり」を可能にする指導力を願ってやまない。